
季節外れのバレンタインネタ

ヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

季節外れのバレンタインネタ

【Nコード】

N4100V

【作者名】

ヒイロ

【あらすじ】

先輩と後輩のバレンタインネタ

みなさんは聖ウアレントリーヌという方を知っているだろうか。この人は、当時軍で禁止されていた兵士の結婚を秘密裏に手伝ったため、軍の上層部のかた方に捕まり拷問の末に撲殺されてしまった。そこで人々はこの聖ウアレントリーヌのことを悼んで記念日を作り彼の栄誉を讃えた。それが二月十四日、バレンタインデーなのである！

だから！バレンタインデーだからと言ってチョコをあげたりする習慣はおかしいのだ。それを全国の男どもに言いたい！この習慣は日本のお菓子メーカーの策略なのだ。それ故に、たとえ今日チョコをもらえなかつたとしても全然悔しくなんか…ね。

というわけで今日は待ちに待つーゴホン、バレンタインデーという訳なのである。別に昨日は今日が楽しみ過ぎて寝られなくて徹夜したーとか、朝に呼び出しの電話かメールがいつ来てもいいように携帯を肌身離さず持ってた等の行為は一切してませんよ？いや、ほんとに。だって策略なんだぜ？わかつてるのにわざわざ架からないつてさて、そんなことはどうでもいいとして、とにかく眠いのである。理由は特にないが。何故か、いつもより一時間も早く学校に着いてしまったせいで、することがないのである。机の中の確認と下駄箱の確認する以外の行動の選択肢はなかつたし、することもなかつたからしぶしぶ、確認に行ったのであるー

…結果だけ言つと拾得物はあつた。
俺の机の中に俺宛ではない、隣の席の人宛のチョコレイトが三つほど。

…別に悔しいわけでも妬ましいわけでもないのでもそのままそおつ

と戻しておく。

ついでにさつき拾った適当なゴミ類を入れとくでしょう。べつに嫌がらせとかではなくたまたまそこにあつたからだからな
チョコレート自体には罪はないのだから何もせずにその場を立ち去った。

まあ、そんなこんながあり、人がいないんじゃないじゃあもらえなーゴホツ
暇だからだれかが来るまで生徒会室で待つとしよう。

ガチャ

「おはよーございます…」

…一応言つてはみたがやはり誰もいないのか、返事は帰ってこなかった。

「ふう…」

なぜだか無性に疲れたような気がする…

椅子に座つてみると、徹夜だったのとさきほどの間違いチョコとで一気に疲れが増えてきた…

身体が一気に沈んでいくような感覚と共に俺の意識はとんでいった――

「…。……………」

ユサユサ

「…。……パイ！」

夢の中にいた現実の彼女やいづこな…からあと一步で念が…チョコレートをも
らえるはずだったのに、ちょうどいいところで起こされてしまった。
「誰だ？あと少して彼女さんからチョコレートをもらえるはずだっ

たのに台無しにしゃがったやつは！」

「その彼女さんですが、何か？」

「何か？じゃねえよ！貴様のせいで俺のチョコレートが……え？」

「なんなんですか。その夜中に居間でAVを見てた最中に偶然妹が入ってきたときのような目は」

…普通に驚いていると言えないのだろうかこの後輩は。

「あと何であればやすい居間なんかで見るとだよ！絶対に誰かが入ってくる可能性があるだろう！いや、俺は見たことがないから分からないけどな…。そもそも俺は妹いねえし！って俺は一体何個つつこめばいいんだよ！？」

「まさか…先輩がそんな人だったなんて…」

「今の会話でどうしてそうなった！」

「まさか前だけではなく後ろも上にも突っ込みたいだなんて…」

「恥ずかしいんだったらそんなセリフ言うんじゃねーよ！」

あと恥ずかしがって上目遣いが妙に可愛いから無性に可愛いからむかつく。

「え…？ちがったんですか？」

「違うからね。そんないつぺんにし…じゃなくて。」

「ハード系が嫌なんですかあ？じゃあ普通に私と一緒に初夜を過ごしましょうよ！」

「うん。ハードとかノーマルとか言う話ではなくて普通にやりたくないからね」

「ええ！？」

「なんでそこに驚くんだよ…」

「そ、そんな…ここまで言っても興味がないなんて…」

先輩もしかして……ゲイなんですかあ…？」

「いやいやいや。おかしいだろ、なぜにすぐそっちに持っていく。俺は普通に——」

「男の子が好きなんですネ！」

「違っつちゅーに！」

「じゃあ…小さい女の子が大好きなんですわっ！」

「ロリじゃねーよ」

「じゃあ年上が好くー」

「年上好きでもないからねっ？俺は普通の同年代の女の子が好きだからねっ！？」

「私みたいに？」

「そう！お前みたいなのが一番タイプだよ！」

「ほんとですか！？」

「ああ！」

「えへへ…ありがとうございます、先輩」

「……どういたしまして」

嵌められた…この後輩は変な会話をして、俺を陥れよとしているの
だろうか…

「まったく…突っ込みどころがたくさんある後輩でつかれるよ…」

「上と下あわせっ」

「俺が悪かった。そう帰ってくるのが分かったのに忘れてたよ。
もうそれは分かったからそっち系の話はやめようか」

「…エッチい女の子は嫌いですか？」

「いや…好きとか嫌いではなく、女の子なんだから、もう少しお
しとやかにして……」

「ところで先輩。何でこんな所にいるんですか？」

「急に話をそらすんじゃねえよ！今のセリフを言うのってけっこう
恥ずかしかったんだぞ！」

「で、なんでこんなとこにいるんですか？」

「ついにはスルーしやがった」

「どうせ昨日一日中ネットでもしてたんでしょっ？」

「…ああそうだよ」

口が割れても昨日一日中お前のチョコを待ちきれなくて、遠足前の
小学生の気分を味わったとは言えないからな。

「まったく…いくら楽しいからといって、そう一日中もしてたら疲

れるでしょう？」

「…まあな」

「そういう疲れた先輩にこれをプレゼントしますよ。
疲れたときには甘い物がいいんですよ」

「ああ…ありがとう…」

甘いものと聞いてなにか脳裏をよぎる物があった。

…甘いもの…甘いもの…ん？甘いものだと！？

「まさかお前それって…」

「べ、別にこころを込めて作りました、とか実は料理下手で先輩のために一生懸命に作りましたとかいうツンデレ要素なんか何もありませんよ？　ただ渡すタイミングが掴めなかっただけですから変な気起こさないでくださいね」

「おお……」

「……？」

「よっしゃー！！ついに手に入れたぜ、人生初となるチョコレート
！」

これをどれだけ待ったことか！はっ聖ウアレンティヌス？誰だよそれ。企業の策略？そんなものもらってもいない可哀相なやつ台詞だろ？もらってないやつ台詞なんて俺には通用しない。なぜなら俺はそいつらを一蹴出来る秘蔵アイテム、チョコレートをもっているからな！

「後輩くん！」

「はっはい！」

「ありがとう！　これは一生の宝物にするから！」

「そこまですることないですからね！？」

いやこれをもらえるのはどれだけうれしいことか！

ホントに比喻ではなく一生の宝ものにしたい気分ですよ！

「それにしても…」

「ど、どうかしたんですか？」

くれる可能性が0ではないやつはこいつしかないと認めてたがまさ

か本当にくれるとは…

「たまたまですよ、たまたま今日友達用に持ってきたら一個余ったので先輩にあげるんです。先輩のために作ったのではないですからねっ!」

「へーそうなんだー」

「なんでそう棒読みなんですか!」

こんな朝からその友達さんはいるんだねー。

「ごめんねー」

「にやにやすんじゃねーですよ!」

「ごめんねー」

「だからにやにやするな——!!」

後輩の叫び声が早朝の学校に響いていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4100v/>

季節外れのバレンタインネタ

2011年10月8日19時04分発行